

秋の恵みで避難者激励

秋葉区 稲刈り 食事会を満喫



福島県から避難している子どもたちと、稲刈りで交流する東京家政大学の学生たち＝新潟市秋葉区

東日本大震災で福島「子連れらを励まそうと、このほど、東京家政大学
県から避難している親」新潟市秋葉区小須戸で（東京）の学生らが避難

者との稲刈り交流会を開いた。作業に汗を流した後は、学生が開発に関わった洋菓子に舌鼓を打つなど、親睦を深

めた。

家政大は2007年から、酒造会社「越後鶴亀」（西蒲区）、米穀販売会社「エコ・ライス新潟」（長岡市）と協力し、江戸末期から昭和初期にかけて本県で栽培されていた酒米「白藤」を復活させ、日本酒や菓子をつくるプロジェクトに参加。本県関係者との交流を続けている。

震災後、学生たちは湯沢町のホテルに避難してきた人たちをボランティアで支援。卵や乳製品にアレルギーがある子ども向けの菓子などを手

作りした。新潟市のアパートなどに移った避難者も多いことから、白藤を栽培する田んぼがある小須戸での交流会を企画した。

稲刈りには、秋葉区などに避難している7家族と学生ら計約40人が参加。白藤が黄金色に実った田んぼで、歓声を上げる子どもたちと一緒に、鎌を使って稲を丁寧に刈り取った。

続く食事会では、学生が長岡市の菓子店と一緒に白藤の米粉を使って開発した「シュークレープ」を初披露。避難者も一時

帰宅の際に収穫したという福島県産の新鮮なナシを振る舞った。

いわき市から子ども2人と避難している緑川敦子さん(37)は「湯沢にいた時から家政大の皆さんにはお世話になった。子どもを外で思い切り遊ばせることができて良かった」と笑顔。家政大のリーダーを務める3年生の高橋菜里さん(20)は「避難所では予想以上にアレルギー対応食の要望があった。今回の経験を栄養士として将来に生かしたい」と話していた。